HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北海道の小規模自治体における地域文化の維持構造 －「沼田町夜高あんどん祭り」の事例－
著者	鈴木，健太；Suzuki，Kenta
引用	北海学園大学大学院経済学研究科　研究年報(26)：1-12
発行日	2026-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

〈論文〉

北海道の小規模自治体における地域文化の維持構造

——「沼田町夜高あんどん祭り」の事例——

鈴　木　健　太

はじめに

⑴　問題意識と研究目的

人口減少の進行と地域社会の疲弊を背景に、担い手の確保が要となる地域文化[1]の維持・存続は、いかにして可能なのか。これが本稿の問題意識である。

地域文化が地域住民や地域社会に果たす機能は、①固有の歴史と風土を有し、多様性があること、②地域共同体によって担われ、共同創造され、次世代に継承されること、③地域の共同性を育むこと、④地域住民のQOLや人格形成に影響すること、⑤地域の活性化に寄与することである、とされている（鈴木2024：90）。例えば、地域文化を文化装置と捉えれば、人と人を結びつける機能を果たす。これは、地域住民に「われわれ意識（We-Feeling）」をもたらし、コミュニティの結束力を強化する。また、高度経済成長期以降の地域開発や外発的発展が、さまざまな地域問題を噴出させ、地域社会を疲弊させたことは、周知の通りである。ここにおいて、「物質（モノ）の豊かさ」から「心の豊かさ」を求める社会意識の変革と実践があった。例えば、文化行政（文化政策）による地域づくり、内発的発展論による地域づくりなどが挙げられる。いわゆる「文化の時代」が希求され、多くの自治体で地域住民による文化活動が盛んにおこなわれたのである。このように地域文化は、観光活性や経済活性だけでなく、人間の根源的な欲求、つまり文化的欲求を満たし、QOL（生活の質、暮らしの質）の向上、幸福に寄与する。

本稿でいう地域文化の維持・存続とは、ここまで述べてきた地域文化の諸機能の源泉となる、担い手の継続的な維持・存続を意味する。

現在、小規模自治体[2]における地域文化が、人口減少、少子化・高齢化のなかで、担い手不足、ひいては地域文化の消滅という危機に瀕している。そこで、本研究の目的は、地域文化の維持・存続がいかにして可能となっているか、担い手に地域文化を維持・存続させていく意識・働きかけがあるかを明らかにすることである。

本稿では、地域文化のうち、祭り・祭礼に焦点を絞ることとする。その理由は、地域文化の担い手による維持・存続や、それに係る社会意識と社会的行為に着目した場合、地域文化一般（イベント、住民の文化活動など）のもつ機能と祭り・祭礼のもつ機能が共通すると認識しているからである。

⑵　地域文化の担い手に関する先行研究の検討

地域文化の維持・存続形態に関する先行研究を確認すると、担い手の確保について、さまざまな対応がみられる。

卯田卓矢・阿部依子（2015）によれば、従来の祭りをイベントと融合させ、祭りの変容を通して、地域外住民が担い手となることで存続が可能になった。また、井上果子（2019）は、集落における伝統文化の維持・存続にあたって、新しい参加者として外部人材・組織・他出者との連帯意識について調査した結果、移住者、帰省者、外部ボランティアを受け入れることができる許容度が確認できたという。川崎和也（2019）によれば、家1軒から1人を鉾山の曳き手として参加を募るが、諸事情による不参加の家から不参加料を徴収し、その徴収金で曳き

[1] 本稿で地域文化とは、祭り・祭礼・祝祭、伝統・伝承・民俗芸能、イベント、フェスティバル、アート・芸術、社会教育・文化施設でおこなわれる地域住民の文化活動、と包括的に定義する。

[2] 本稿では、小規模自治体を人口5,000人未満であり、かつ行政サービスの低下、ひいては産業・経済、医療・福祉、教育・文化を軸とする地域社会総体において、住民生活が困難な状況にあろう自治体という意味で使用している。小規模自治体については、鈴木文彦と中川彩菜の定義がある。前者では、小規模自治体を小都市（人口5万人以上10万人未満の市（人口2万人以上の町村を含む））、町村（人口5,000人以上の町村（人口5万人未満の市を含む））、小町村（人口5,000人未満の町村）と区分している（鈴木2024：2）。また、後者による定義は、人口3,000人～5,000人を小規模自治体としている（中川2023：3）。さらに中川は、人口3,000人未満になると自治体単独での行政サービスの維持が困難になるという（中川2023：3）。これらを踏まえ、北海道の地域社会の特異性を考え定義した。北海道では179市町村のうち、人口5,000人未満の自治体は、45.3%にものぼる。さらに、人口3,000人未満の自治体は、25.7%となっている（2020年度国勢調査）。

手のアルバイトを雇い、担い手を補っている。芳賀幹大ほか（2020）では、集落から転出した親戚・友人の協力、集落内にある小学校・中学校の生徒が参加することで担い手不足を解消したとある。

次に「都市祭礼（祝祭）」の研究蓄積がある都市社会学から、担い手問題に係る先行研究を検討する。まず、松平誠は、現代を社会解体期とみなし、伝統的祝祭に対し「合衆型」祝祭を提起する。「合衆型」祝祭とは、「不特定多数の人びとがその自由意思で集まって、ごく一時的な結びつきを頼りに形成される」ものである（松平1990：17）。その社会背景には、松平の言葉を借りれば、個人に自己充足的（コンサマトリー）な社会意識があり、祭りへのコミットを「選ぶもの」として認識している。たしかに、現代社会は、個人化しているといえるが、地域住民の地縁に基づいた祭りが多く残存していることも事実である。したがって、祭りの担い手不足という問題に照らせば、松平の想定する「合衆型」祝祭は極端な形態であり、担い手不足問題の射程を捉えるものではない。

岸和田だんじり祭を事例とした吉田竜司は、担い手確保問題について、「自町居住者」・「転出者」・「助っ人」と3類型し、事例対象において自町居住者の約5倍、うち過半数は「助っ人」が支えていると報告する（吉田2010：36）。「助っ人」は、青年団員の学校の友人、職場の同僚などの関係を媒介した勧誘・紹介で確保しているという（吉田2010：36）。

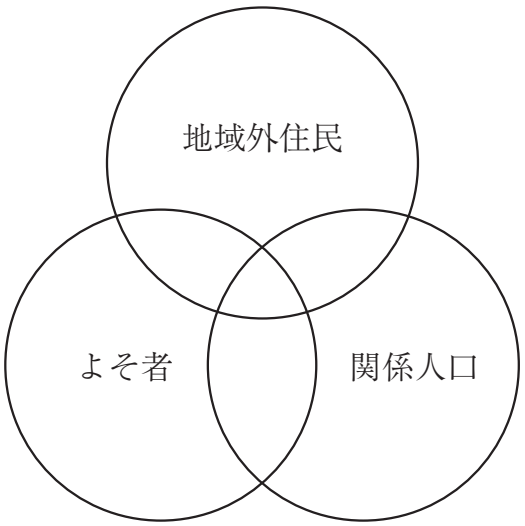
また、竹元秀樹は、宮崎県都城市の「おかげ祭り」を事例に、担い手不足問題を現在の中核メンバーが「現世代の限界の自覚」をして、自己鍛錬し、下の人間を育てさらに引き上げるために、上の人間も成長していくことが求められる、とする（竹元2014：239-240）。竹元の先行研究には、地域外住民による人員確保、という視点は見当たらない。

武田俊輔は、滋賀県長浜市の長浜曳山祭を事例とし、囃子（シャギリ）の担い手確保について言及している。この祭りでは、行政が保存会に補助金を出し、保存会が小学生・中学生に囃子（シャギリ）を教育しているという（武田2019：164-168）。また長浜曳山文化協会が学校教育と連携し、子どもたちに囃子（シャギリ）を教えることで、山組外で子どもたちが曳山祭に関心をもつなど、フォーマル教育、いわば地域教育の効果が見受けられる（武田2019：171）。しかし、武田も地域外住民という担い手確保には触れていない。なぜなら、山組の担い手不足は、他の町（町内）から確保が可能だからである。

これらの先行研究で共通することは、地域外住民の参加、移住者や外部ボランティアの参加、商品―貨幣連関としての雇用、親戚・友人の協力、学校・生徒の協力、他の町（町内）からの人的動員など、そこに住まう地域住民以外の他者が担い手となることで、祭りが維持・存続される、ということである。しかし、批判的に述べるならば、地域外住民、ボランティア、学校の生徒など、地域社会ごとの事情はあるが、「地域外の人々が参加してくれることで、祭りを維持できている」、という報告にとどまっており、地域外住民という担い手に関する一貫した理論的枠組みが提示されていない。つまり、祭りの担い手における「地域外住民」の概念規定が理論的に乏しい。

本稿では、ここで祭りの担い手としての地域外住民を「よそ者」・「関係人口」という概念で捉えていきたい。これらの概念は、近年、地域社会学などの分野で注目されており、理論的枠組みとして採用することが望ましいと考える[3)]。よそ者とは、「一般に、同じ地域や空間内部にいる関係者ではなく、自分たちとは異質な存在として捉えられる人である」と定義されている（敷田2005：74）。さらに、よそ者のもたらす効果には、①技術や知識の地域への移入、②地域の持つ創造性の惹起や励起、③地域の持つ知識の表出支援、④地域（や組織）の変容の促進、⑤しがらみのない立場からの問題解決、があるとされる（敷田2009：89）。こうしたよそ者論を踏まえ、田中輝美は、関係人口を「特定の地域に継続的に関心を持ち、関わるよそ者」であると定義する（田中2021：77）。ただし、関係人口については、この定義では射程の幅が広く、曖昧さが拭えない。例えば、ふるさと納税など、地域社会に直接、赴かなくとも関係人口の定義に当てはまる。したがって、何を以て関係人口とするか、といった疑義が残る。ここで、地域外住民・よそ者・関係人口の言葉の定義を図1のように整理する。

図1　地域外住民・よそ者・関係人口の関係性



筆者作成

3) 例えば、地域社会学会2025年度第50回大会において、三田絵里加氏が「人口減少下の地域社会の存続におけるよそ者の比較―北海道岩見沢市を事例に―」という題目で報告している。

まず、地域外住民とは、基本的に当該地域社会に関与がない他地域に居住する住民のことである。次に、よそ者については、先の敷田の定義にしたがうが、何らかのかたちで当該地域社会に関与のある者とする。地域外住民とよそ者は、他出子、親戚、またボランティアなどが例として挙げられる。関係人口については、先の田中の定義にしたがう。しかし、本稿では、分析の焦点を絞るために、関係人口を、地域外住民やよそ者が関心のある地域社会に直接的に訪問し、主体的・継続的に関わり、何らかの機能を果たすもの、と定義づけることとする。こうした把捉によって、地域外住民・よそ者・関係人口は、それぞれ部分的に重なる概念であることが確認できる。

よそ者に関して、敷田麻美（2009：94）は、「よそ者性は、よそ者とそれを受け入れる地域との関係で」決まるという。つまり、よそ者であれば誰でもよい、というわけではない。地域社会では、祭りの歴史性、意味、コンセプトを理解した人物が求められる。なぜなら、社会システム理論の枠組みに照らせば、よそ者は、「祭り・祭礼の秩序を攪乱する存在」と認識されると、システムの外部に排除されてしまうからである。すなわち、よそ者は、上述のような効果を地域社会にもたらす一方、排除の対象にもなりえる。したがって、よそ者・関係人口が、どのように地域社会に歓待されるか、ということが課題となる。

次に、担い手たちの意識・働きかけについて検討する。

過疎・限界集落・限界自治体化していく地域社会では、住民の「諦め」から生じる地域社会への「誇りの空洞化」（小田切 2014：41）が問題とされる。小田切は、長年、この問題に着目しており、地域社会が疲弊しても、なお、地域文化を維持・存続させる意識をもち、働きかけをおこなう地域住民がいることに期待している。地域文化の維持・存続に関しては、担い手が存在するか・否か、のみならず、担い手がどんな意識を持ち働きをおこなっているかが、重要なポイントといえる。

社会学、とりわけ理解社会学では、このような意識・働きかけについて行為者が思念した意味とその行為を「理解」することに努めている。社会的行為を理念型として提唱したのは、M・ウェーバーである。それによれば、社会的行為は、次の 4 つに分類できる（M・ウェーバー（1922＝1972：39））。

社会的行為には、①目的合理的行為、②価値合理的行為、③感情的行為、④伝統的行為、がある。①は、「外界の事物の行動および他の人間の行動について或る予想を持ち、この予想を、結果として合理的に追求され考慮される自分の目的のために条件や手段として利用するような行為」であり、②は、「或る行動の独自の絶対的価値―倫理的、美的、宗教的、その他の―そのものへの、結果を度外視した、意識的な信仰による行為」である。③は、「特にエモーショナルな行為。これは直接の感情や気分による行為」であり、④は、「身についた習慣による行為」である。

本稿では、社会的行為論は、地域文化を維持させる社会意識が担い手にあるか、といったことを分析する際の理論的枠組みとして有効であると考える。これまで、社会意識の変化＝社会的行為の変化に関する論考は、内田和浩（2011）に代表的なように、教育学や社会教育学の分野でおこなわれることがあった。しかし、地域文化の担い手に関する社会意識の変化＝社会的行為の変化に関する社会学的研究は、管見の限り見当たらない。したがって、本稿における分析段階では、社会的行為の変化に着目することで、担い手の意識・働きかけを分析していく。

⑶　理論仮説

本稿は、地域文化の現状がどのようになっているのか、維持・存続の在り方はどのようなものなのか、担い手に地域文化を維持・存続させる社会的意識があるのか、という実態に迫るため、北海道沼田町の地域文化「沼田町夜高あんどん祭り」（以下、祭り）の維持構造について、質的調査に基づき分析する。

地域社会における地域文化の正機能は、人口の社会減の抑制、他地域からの移住・定住の可能性、他出子の U ターン、さらによそ者・関係人口による地域社会への継続的な関わりなど、多様な効果が期待できる。言い換えれば、「地域文化による地域社会の持続可能性」である。しかし、これを実現するためには、地域文化を絶やさない社会意識や社会的行為の変化、地域文化の担い手を確保という課題がある。

したがって、理論仮説は次のようになる。人口の再生産が厳しい縮小社会化する地域社会において、①地域文化を維持させていこうとする社会意識のある地域住民が存在し、維持に向けた社会的行為がおこなわれていること、②よそ者・関係人口という他者が継続的に地域社会に関わること、この 2 点が地域文化の維持にとって重要である。その上で、作業仮説としては、担い手の属性、担い手が減少するなかにおいても祭りを継続できているしくみ、祭りが創造された当初と現在では社会的行為論的に変化が生じた、ということを分析する。

本稿では、北海道という地域社会および地域文化の形成過程が、本州のそれと異質である（例えば、本州では自然村を歴史的な基底とし、数百年単位で継続している地域文化もある）ことから、調査対象の選定理由を次の 3 点とした。①入植・開拓という北海道の地域社会形成が本州と比して特異的であること、②それゆえ、地域文化は北海道の各地域社会において創造・創出されたものが多いこと、③小規模自治体であるが総人口の 20 倍以上にものぼる観光客を集客する地域文化を有していると

いう、北海道においても希有な地域文化であること、および「北海道三大あんどん祭り」のひとつであり知名度があること、である。

この北海道における地域文化の特異性を明らかにすることで、日本における地域文化の維持・存続の理論に貢献すると考える。

(4) 研究方法

本研究における方法は、対象地域のフィールドワーク、被調査者への半構造化インタビューを採用した。半構造化インタビューとは、被調査者の状況に応じて設問を変更・追加する場合もあり、また自由回答も調査で得た一次情報として採用する調査方法である。構造化インタビューとは、アンケート調査に代表されるように、順序立てた設問に対する回答のみを一次情報として扱う調査方法である。また非構造化インタビューとは、ライフヒストリー調査にみられるような、大まかな設問だけが決められており、被調査者に自由に話していただく調査方法である。したがって、半構造化インタビューは、構造化インタビューと非構造化インタビューの中間に位置する方法である。

半構造化インタビューにおける質問項目は、主として、基本的データとして祭り実行に係る構成員の属性、構成員数、平均年齢など設定し、具体的データとしては、あんどんの歴史、資金調達の方法・収支決算、担い手の育成・継承、何のために祭りを実行しているかに関する思い、沼田町にとっての祭りの意義と効果などを設定した。さらに、被調査者による設定した質問項目以外の自由回答や語りもデータとして採用した。

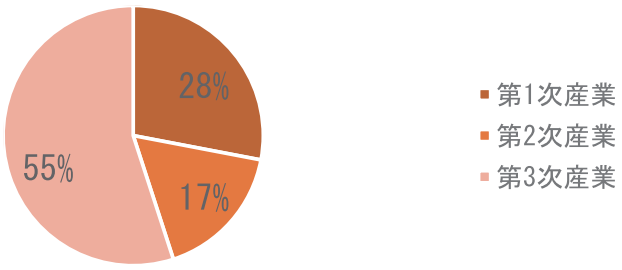
1．調査対象地域の概要

沼田町は、北海道のほぼ中心の空知管内に位置する。札幌市からは、約 1 時間半の距離にある。官治主導・開拓・入植という地域社会形成に特異性がある北海道で、沼田町の本格的な開拓は、1894 年、沼田喜三郎の尽力により端を発する。この背景には、北海道庁が組合華族農場（雨竜農場）を開設したが、1893 年に組合は解散した（沼田町 1995：127）。当時、東本願寺法主の大谷光瑩伯爵（大谷家）は、組合華族農場に参画していた。組合華族農場の解散を聞いた沼田喜三郎は、東本願寺に赴き「雨竜本願寺農場」の設立を説いた（沼田町 1995：129）。東本願寺は、大谷家名義の土地の貸し下げを受けることを決め、1893 年 10 月、総面積 1,170 余坪の貸し付けを出願した、という農業開拓の経緯がある。

一方、沼田町の当初の主要産業は炭鉱業であったが、1968 年、1969 年に相次いで 3 つの炭鉱が閉山となった。現在の基幹産業は、農業である。商業は町の中心部に集積している。2020 年度の産業別就業人口割合をみると、第一次産業が 28%、第二次産業が 17%、第三次産業は 55%となっている（図 2）（総務省統計局 2022）。

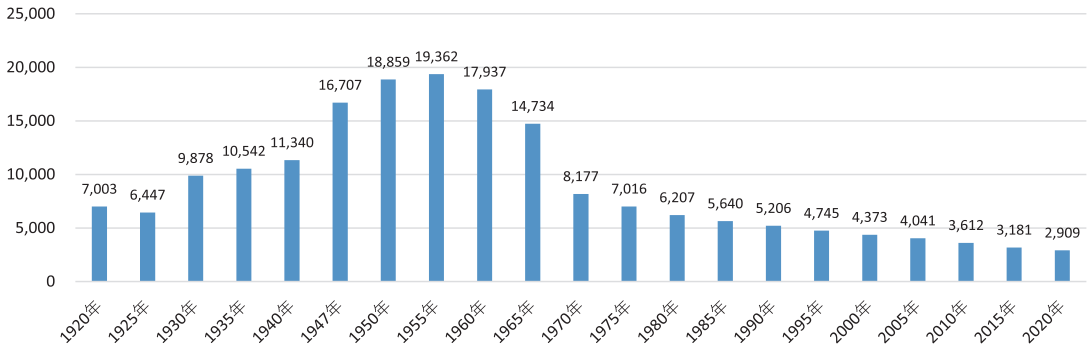
次に沼田町の総人口は、炭鉱業が盛んだった 1955 年の 19,362 人をピークに急速な右肩下がり傾向にある（図 3）。2020 年の総人口は、2,909 人であり、過疎地に指定されている。2020 年総人口のうち老年人口は 1,240 人で、全体の 42.6%を占めており、やや限界自治体化しているといえる。国立社会保障・人口問題研究所（以下、社人研）による将来推計人口においても、人口減少に歯止めがかからず、2045 年には、総人口 1,621 人となり、

図 2　沼田町の産業就業人口割合



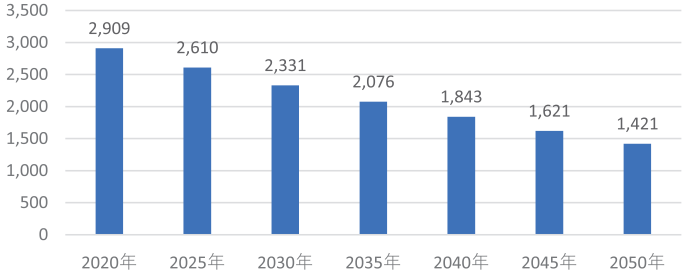
出所：総務省統計局（2022）に基づき筆者作成

図 3　沼田町の人口推移　　（単位：人）



出所：国勢調査に基づき筆者作成

図４　沼田町の将来推計人口　（単位：人）



出所：社人研（2024）の資料に基づき筆者作成

2050 年には、1,421 人となる（図４）。推計人口における 2025 年人口は、2,610 人だが、実際には、2,746 人（2025 年３月末時点）であり、人口減少は緩やかである。

また、教育面では、2010 年に沼田高等学校が閉校した。交通面においては、JR 留萌本線の留萌―石狩沼田間が 2023 年に廃線し、2026 年には、石狩沼田―深川間の廃線が決定している。

２．沼田町夜高あんどん祭り

沼田町夜高あんどん祭りは、毎年、８月下旬の金曜日・土曜日に、夜高あんどん実行委員会・沼田町観光協会・沼田町夜高あんどん保存会主催で開催される。八雲町の八雲山車行列、斜里町のしれとこ斜里ねぷたと合わせて、北海道の三大あんどん祭りのひとつとして数えられている。とりわけ、道内で唯一のあんどんのぶつけ合い、いわゆる喧嘩あんどんが有名である。高さ７m、長さ 12 m、重さ５トンのあんどんを激しくぶつけ合い、あんどん前方に設置してある釣物（つりもん）を破壊する。これは、破壊と再生をキーコンセプトとした五穀豊穣を意味している。

歴史的には、1977 年に第１回として町民まつりのなかで、商工会・農協青年部の２基のあんどんが披露され、第２回に小学校のあんどん２基、農協と土地改良区合同のあんどん１基、役場あんどん１基が参加し、計６基のあんどんが披露された[4]。第６回には、農協青年部・商工青年部・農協土地改良区・役場・高等学校・中学校・小学校・幼稚園の計８基が参加することとなり、第 10 回では保育園、第 14 回には、自衛隊沼田分屯地、自衛隊旭川駐屯地第２特科連隊の２基、郵便局・沼田農開・広域水道企業団の合同１基が参加した[5]。また、1994 年に北海道３大あんどんサミット（八雲山車行列・しれとこ斜里ねぷた・沼田夜高あんどん・小矢部夜高あんどん）が沼田町で開催された[6]。

祭りの観光客数は、第 11 回から集計がはじまった（図６）。観光客は、道内各地から沼田町に訪れ、最も多いときで第 19 回に 135,000 人を記録している。観光客数に波があるが、これは、天候によるものである。悪天候やそれによる祭りの短縮などで観光客数が減少した年もある。第 11 回から第 48 回の観光客数は、平均で 66,829 人である。第 12 回は大雨で中止、第 44 回・第 45 回は新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大防止のため中止となった。

この祭りの特徴は、沼田町の伝統文化ではなく、沼田町開拓の祖である沼田喜三郎の出身地の富山県小矢部市津沢から移植された点である。1976 年、まちおこしにしのぎを削っていた当時の商工会長が、沼田町を訪れていた小矢部市津沢の獅子舞指導団に祭りの存在を知らされ、翌年、商工会長を含めた地域住民が現地を視察し、移植することを決意したことにはじまる（沼田町夜高あんどん保存会ほか 2002：1-2）。その意味で、この祭りは、移植可能な祭り[7]、あるいは、沼田町で創出された祭礼的なもの[8]といえる。

[4] 夜高あんどん祭り公式サイトを参照（最終閲覧日 2025 年３月 19 日）

[5] 同上

[6] 同上
なお、母村である小矢部市の夜高あんどんの参加は、サミットであるため特別参加した。

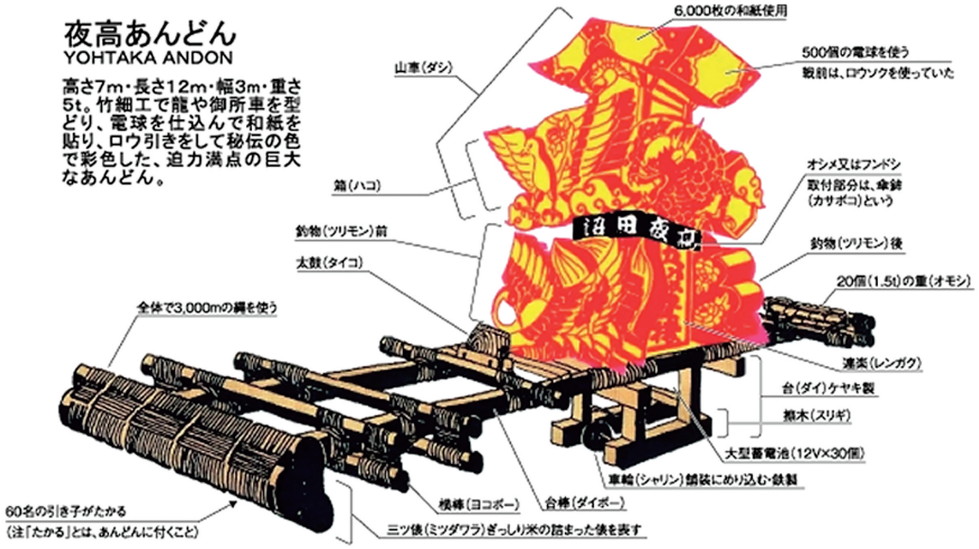
[7] 移植可能な祭りとは、青森のねぷたまつりが、全国のさまざまな地域でおこなわれるような祭りを指す（この概念は 2024 年５月 11 日（土曜日）・地域社会学会第 49 回大会にて、筆者が武田俊輔氏（法政大学社会学部教授）よりアドバイスをいただいた概念である）。北海道でいえば、しれとこ斜里ねぷたが典型である。

[8] 祭礼的なものとは、鈴木健太（2024）によれば、①神事性の有無にとらわれず、②非日常性を伴う周期的な共同性の（再）確認、③社会意識および成員の統合・結合、④対外を意識し催され、それゆえ地域の文化的独自性が高まる、⑤住民の生活のリズム（年中行事的なもの）、これらのうち①と②～⑤における社会的機能のいずれかが該当するものを祭り・祭礼とは区別し、祭礼的なものと定義されている。

3．あんどん連と夜高あんどん実行委員会

祭りは、「あんどん連」という団体が主体となってあんどんを曳き実演される。あんどん連には、役場あんどん連、JA 北いぶきあんどん連、商工会あんどん連、自衛隊あんどん連、小学校あんどん連、中学校あんどん連、認定こども園あんどん連の 7 団体がある。このうち、ぶつけ合いをする大型あんどん（図 5 および写真 1）を所有するのは、役場あんどん連、JA 北いぶきあんどん連、商工会あんどん連、自衛隊あんどん連である。本研究では、大型あんどんに焦点を絞り、3 つのあんどん連および夜高あんどん実行委員会（以下、実行委員会）に半構造化インタビューをおこなった[9]。被調査者は、A 氏（役場あんどん連担当者）、B 氏（JA 北いぶきあんどん連担当

図 5　沼田町の夜高あんどん



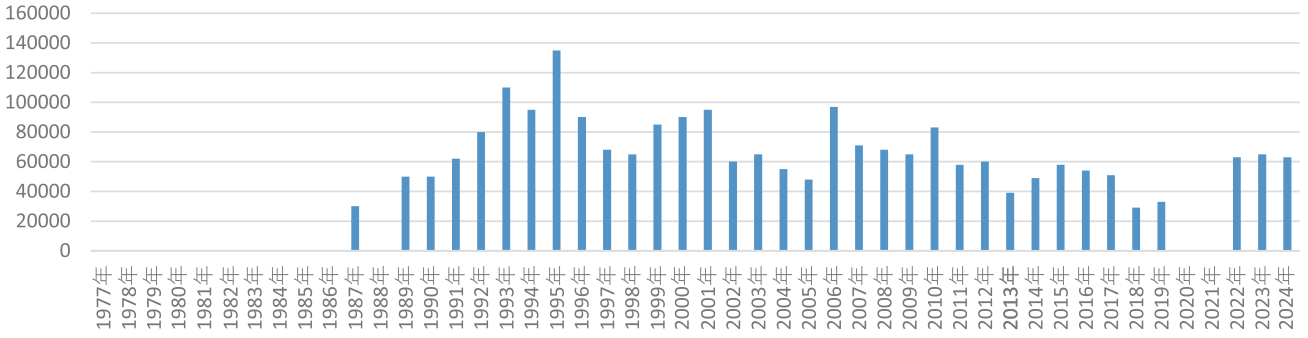
出所：夜高あんどん祭り公式サイト

写真 1　大型あんどんのぶつけ合いの様子

出所：2024 年 8 月 24 日、筆者撮影

[9] 役場あんどん連は担当者 A 氏（沼田町外出身者）に対し、2024 年 9 月 25 日(水)13 時 30 分から 2 時間のインタビューをおこなった。JA 北いぶきあんどん連は担当者 B 氏（沼田町外出身者）に対し、2024 年 11 月 12 日(火)13 時 30 分から 2 時間のインタビューをおこなった。商工会あんどん連担当者 C 氏（沼田町出身者）と夜高あんどん実行委員会事務局 D 氏（沼田町出身

図6　夜高あんどん祭りにおける観光客数の推移　（単位：人）



出所：夜高あんどん祭り公式サイトを基に筆者作成

者）、C 氏（商工会あんどん連担当者）、D 氏（実行委員会担当者）の 4 人である。以下、半構造化インタビューに基づいた一次情報を整理する。

(1)　あんどん連の構成員

役場あんどん連の構成員は、130〜140 人で、職員全員が対象になっている。また、職員の家族も対象となる。構成員の平均年齢は 40 代で、構成員数が最も多かった時期は 2002 年に 160 人ほどだった。構成員になる条件としては、役場職員であることである。役場あんどん連に規約等はないが、裁許長[10] などの役割は打ち合わせで決定される。

JA 北いぶきあんどん連の構成員数は、80〜100 人である。平均年齢は、年々高くなっている。構成員数が最も多かった時期で、「100 人だと思う」（B 氏）、と回答があった。構成員になるためには、青年部に入ること、農家であること、JA 職員であること、農家の子弟であることが挙げられた。構成員のなかには、農家 50 戸、そのうち 35 戸が U ターン者で跡取りとしている。また、構成員には、近隣の深川市、滝川市、雨竜町に在住する職員もいる。規約などはないが、青年部を終えた人が裁許長になることが慣例になっている。

商工会あんどん連の構成員数は、商工会員青年部員 10 人で、あんどん製作時は、ボランティアを含めて約 40 人となる。祭りの当日は、80〜90 人の構成員がいるが、あんどんを練行するのは、このうちの半数である。そのため、「旭川市からあんどん練行を手伝う 24 人がいなければ、練行することが困難」（C 氏）な状況であるという。構成員数の平均年齢は、40 代である。構成員数が最も多かった時期では、商工会青年部 40 人がいた。しかし、現在は、10 人に減少した。さらに、この 10 人のうち、祭りに参加するのは数名となっている。構成員になる条件は、「やる気があれば誰でも」（C 氏）という。また、規約などはないが、裁許長は 50 歳までという年齢制限を設けている。

(2)　祭りへの参加

役場あんどん連は、祭りは、職務専念義務があるため、ボランティアとしておこなっているが、「曖昧な部分もある」（A 氏）という。なお、自衛隊あんどん連は、「業務としてあんどんを製作している」（A 氏）という。あんどん参加は原則義務であり、職務の一環とされている。祭りには第 2 回目から参加している。あんどんの練行は、「旭川市の自衛隊の協力がなければ困難」（A 氏）な現状にあるという。他のあんどん連や実行委員会との関係は、実行委員会に総責任者と裁許長が出席することである。

JA 北いぶきあんどん連は、「精神的にはボランティアとして参加している」（B 氏）という。ただし、祭りの 2 日間の振替休日があることから、業務的側面もある。祭りへの参加は会議で協議して決定する。祭りには第 1 回目から参加している。他のあんどん連や実行委員との関係は、実行委員会の会議に出席することであるが、そこでは「ヨコのつながりがある」（B 氏）という。

商工会あんどん連の祭りへの参加は、「ボランティア、気持ちで来てほしい」（D 氏）という。商工会あんどん連は、第 1 回目から祭りに参加している。

者）に対しては、2024 年 11 月 13 日（水）14 時から 2 時間、同時にインタビューをおこなった。なお、自衛隊あんどん連は、都合上、インタビュー実施は不可能であった。その理由は、自衛隊による機密情報保持ということである。ただし、電話にて、祭りへの参加理由は「役場から頼まれているのでやっている」と回答は得られた（2024 年 8 月 20 日（火）、担当者に電話で聞き取り）。

[10] 裁許長とは、あんどん連において最も権限のある行事責任者である。このほかに、役場あんどん連の資料によれば、総責任者、作成責任者、台車長、本部裁許、裁許、庶務会計責任者、慰労会責任者、監事、若頭長、電線マンの電線頭、角あんどん頭、警備隊長・副隊長、太鼓連頭、笛連頭、唄・舞連師匠、ご祝儀車隊長・副隊長、振舞酒の振舞連頭、パッキン技術長・技術主任、スイッチ技術長・技術主任、バッテリーの電気技術長・電気技術・運搬主任、ガス技術、前棒の前棒頭・副頭、はしご連隊長・副隊長、といった役割分担が決められている。他のあんどん連においても、同様の役割分担があると推測される。

(3) 祭りの参加目的、コンセプト、資金調達、準備期間

役場あんどん連のA氏によれば、祭り参加目的は、「由緒書[11]の目的に賛同していることだ」という。祭りにかかる費用は、200万円規模になる。実行委員会から交付金として20万円が交付される。交付金は、まず沼田町の補助金が実行委員会に補助され、その補助金が交付金として実行委員会から各あんどん連に交付される仕組みである。このほか、地元企業、個人（1人5,000円）などから「ご祝儀」が贈られる。準備期間は6月から100日くらいかかる。

JA北いぶきあんどん連の参加目的は、「祭りの参加目的（由緒書）は、大前提として、JAの組織体として地域社会への貢献を参加の目的・コンセプトにしている」というB氏の発言から理解できる。資金は、総額200万円程度である。また、100万円がJAで予算化されており、内訳は、ご祝儀と実行委員会の交付金からなる。準備期間は、6月から3ヵ月かかり、昼間はJA職員が作業として、あんどんを製作する。夜は農協の青年部が製作する。夜高師（匠）[12]と呼ばれるあんどん祭りの重鎮が1人いる。

商工会あんどん連の祭り参加目的は、商工会青年部に入ったら、あんどんを製作することが目的になっているようだ。それは、「青年部はあんどんを作る」(C氏)、「強制的に」(D氏）という発言にある通りである。資金調達は、寄付金、ご祝儀、実行委員会からの交付金からなる。準備期間は、3ヵ月である。

(4) 担い手不足と育成

担い手の育成について、役場あんどん連は、「先輩と作りながら覚えていく」(A氏）という。夜高師（匠）に指導を受け、説明書の見直しなどもおこなっている。この夜高師（匠）が高齢のため、不足状態にあるという課題を抱えている。また、役場職員が減少していることもあり、担い手不足が懸念されている。

JA北いぶきあんどん連は、青年部のなかで「『祭りとは、こういうものだ』と先輩から後輩へ技術の伝承がある」(B氏）という。一方で、担い手不足が生じている。若い青年部が少なく、JA職員でも若者が少ない現状にある。農家戸数の減少と若手不足を課題として認識している。担い手の継承は、これから取り組む予定であり、「次世代問題」(B氏）だとする。

商工会あんどん連では、担い手育成をおこなっていない。商工会の青年部加入者が少なく、「若い人にあんどんを作る意識がない」(C氏）という。また、「意識があるか否か。あんどんを作りに来ない人もいる」(C氏）と課題を認識している。D氏は、「あんどんに参加するなら、作りの段階から参加してほしい。これからは、祭りを続けるために、外部の人を求める」という。

(5) 祭りの効果、祭りへの思い・意味づけ

祭りの効果について、役場あんどん連のA氏は「知名度の向上」があるという。また、祭りへの思いは、「町のPR、宣伝」である。祭りは、「町民同士の関係を深める」、「異業種の交流で、顔の見える関係になる」(A氏）と考えている。祭りに魅了された女性（地域外住民）が、沼田町に夜高あんどん祭りがあるために沼田町在住の男性と結婚した、という逸話もある。

JA北いぶきあんどん連のB氏によれば、祭りの効果は、「沼田町のイメージアップ、認知度向上、市町村の差別化ができる、沼田町を知ってもらえる」という。祭りへの思いは、「農業振興、伝統を残す、祭りの活気を絶やさない、その責任感や義務感がある」と述べ、「130年のうち50年もやっていれば、伝統だろう」(B氏）という。また、B氏は、祭りは「子どもが思い出を残すもの、原点回帰」、「子どもから高齢者まで、自慢して誇れるもの」、「あんどんは文化、人間に力を与える、アイデンティティにもなる」という。

商工会あんどん連は、祭りの効果を「人々の結束力が強い」(C氏)、「町が有名になる、PRになっている」(D氏）と述べる。また、祭りは「先輩たちがやっているから」(C氏)、「商工振興のため」(D氏）におこなっているという。

(6) 夜高あんどん実行委員会

実行委員会は、1978年5月1日に発足した。組織の目的は、祭りの下準備などの運営を中心としている。実行委員会には規約が定められており、規約に則り運営される。

総会では、各団体の長が集まり、決算・予算、今年のあんどんはいつからおこなうか、などを決める。実行委員会としては1回開催する。実行委員会とは別に夜高あんどん祭り練行会議があり、具体的なあんどん練行に関することは、ここで協議・決定される。沼田町夜高あんどん保存会（以下、保存会）は、祭りの継承を目的として活動している。

現在の実行委員長は、4代目になり、任期の定めはない。「これまでは実行委員長は、商工会長だった」(D氏）という。また、よほどのことがない限り実行委員長の変更はない。実行委員会の構成員とは、祭りに参加する各

[11] 由緒書とは、祭りの本家（富山県小矢部市津沢）より沼田町に贈られた祭りの由来、歴史性、コンセプトが記された書である。原本は、沼田神社に所蔵されている。

[12] 夜高師（匠）とは、沼田町夜高あんどん保存会から祭りへの功績が認められた者である。インタビュー当時では、21名の夜高師がいる。

あんどん連の長などを指す。そのほか、役場の関係者、警察、警備、JR 駅長などが参加している。実行委員の平均年齢は、約 40 代である。

D 氏によれば、祭りでは、「かつての子どもが遊びに来る」、「商工会あんどん連が町外住民の担い手を受け入れて」いる。また、本家（富山県小矢部市津沢）の人々は、沼田町の祭りを見て、女性があんどんを触ったり、あんどんに乗っていることに驚いていたという。なぜなら、祭りは、神事であるからである（「女性は不浄なもの」という見方がある）。D 氏は、「我々のやり方を見て、本家（富山県小矢部市津沢）も女性の参加を受け入れはじめた」、「伝統がないから好きなことができるが、死亡事故などがあると中止になりやすい反面、神事であれば、事故があっても続けられる」、「祭りに関しては損保会社が嫌がるため、傷害保険に入れない」、「今年は 1 社に入れたが、祭り当日のみの保険である」と述べる。

また、祭りの反省や新しい意見に基づいて、内容の改変もある。広報に関して、CM は主に旭川地区に放送している。SNS を重要し、ほかに新聞広告、ラジオ放送（全道）をおこなっている。YouTube での祭りの配信は、2021 年からはじめた。このことにより、「祭りの認識が増えてきていると思う」（D 氏）という。公式 HP は 2021 年に作成された。

収支・決算については、単年度で補助金（1,400 万円）と手弁当資金を基に収支・決算を作成する。CM にかかる費用は、実行委員会と観光協会で按分している。なお、認定こども園、小学校、中学校には、祭りの伝承を目的に保存会から資金が支出されている。

次に、経済効果について、「波及効果は測定していない」（D 氏）という。お店を出した人が潤おう状況にある。C 氏は「商工会あんどん連としては、商店を閉めて祭りに参加するからジレンマがある」という。テキ屋、キッチンカーなどからは、場所代などをいただいている。他方、祭りは、観光客が来られなくなるほどの交通整理が必要となっており、これに対応するためには費用がかかるため、沼田町がどれほど資金を出してくれるかが懸念されるという。近い将来には、「入場制限しなくてはならなくなるかもしれない」（D 氏）、と課題認識している。

祭りの担い手について、実行委員会としては、担い手不足・後継者不足にあるという認識である。担い手の継承について、D 氏は、町外に呼びかけ、子どもに「帰って来い」といっている。また、「『俺がやらないと誰がやる』という人がいないと成り立たない」、「中学校では、中学生が卒業するときに半纏を渡している」という。かつて沼田町に住んでいたが、現在は他地域に居住していて、祭りに関わる人は、「子どもたち（高校生、大学生、社会人）、沼田町に全く縁のない人が何年も参加していて、むしろ、そういう人ばかり。町外の担い手がいないと成り立たない」と D 氏はいう。日頃は沼田町に関わりのない人で、継続的に祭りにのみ担い手として参加する人もいる。

祭りの開催時、ボランティア団体などに委託していることは、「警備、リース（トイレ、椅子、机、発電、交通誘導の看板など）、法的なことに関わる看板は、深川警察署から借りている」（D 氏）という。また、観光客数は、経験値や駐車場の車が何時に何台入れ替わったか、という確認で算出しており、「野鳥の会」のような集計ではないという。

祭りについて、D 氏は、実行委員会として本来のコンセプトは「安全に実行すること」である。その上で、祭りをおこなう目的は、「商工振興」、「継続させるため」、「子どもたちが帰ってきたときに安心させるため」であると述べる。

これらの聞き取り調査を図式化すると、図 7 のようなしくみとなる。

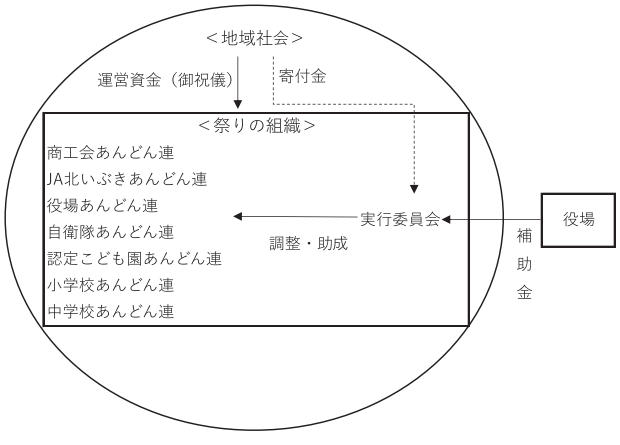
4．分析と考察

(1)　社会的行為論による分析

前述したように M・ウェーバー（1922＝1972）は、社会における成員の行為を①目的合理的行為、②価値合理的行為、③感情的行為、④伝統的行為に分類した。

沼田町の夜高あんどん祭りは、まちおこしのために富山県小矢部市津沢から移植した祭りである。その意味で、この行為は、目的合理的行為といえる。しかし、祭りが約半世紀も続いているうちに、担い手たちの社会意識に変容が生じている。調査で、A 氏は「町民同士の関係を深める」、「異業種の交流で、顔の見える関係になる」と述べ、B 氏は「130 年のうち 50 年もやっていれば、伝統だろう」、「子どもから高齢者まで、自慢して誇れるもの」と述べる。また C 氏は「先輩たちがやっているか

図 7　祭りの構造



筆者作成

ら」、D 氏は「継続させるため」、「子どもたちが帰ってきたときに安心させるため」と述べた。

社会意識の変容は行為の変容に影響を与える。つまり、祭りにおいて担い手たちは、上記の発言にみるように、目的合理的行為から価値合理的行為・伝統的行為に行為類型が変容したといえる。この変容は、祭りを移植した当時の目的ではなく、意図せざる結果として現象している。こうした行為類型の変容が、祭りを維持するための要件になることが明らかとなった。

⑵　担い手としての「よそ者」「関係人口」

次に、祭り実行の要となる担い手について、役場あんどん連、JA 北いぶきあんどん連においては、担い手不足を課題として認識している。役場あんどん連は、行政による人件費削減が担い手不足として問題化している。JA 北いぶきあんどん連では、農家 1 戸あたりの耕作面積拡大、それに伴うかたちで農家戸数の減少と若手不足といった構造的な課題とともに祭りの担い手不足が懸念されている。

しかし、役場あんどん連や自衛隊あんどん連においては、後続の職員・隊員が存在する、あるいは町の合併や自衛隊撤退がない限り、担い手が極端に減少することはないといえる。また、JA 北いぶきあんどん連においても職員や一定の U ターン者[13] がいることは、近視眼的には、安定的な担い手確保が可能である。現時点で、役場・JA 北いぶき・自衛隊における担い手は、各あんどん連の職員・農家・隊員およびその関係者・子弟に限られている。このことは、すなわち、集団内で担い手の確保が可能になっていることを示している。

一方、商工会あんどん連は、担い手不足を課題としており、「やる気があれば誰でも」、「祭りを続けるために、これからは外部の人を求める」、「子どもたち（高校生、大学生、社会人）、沼田町に全く縁のない人が何年も参加していて、むしろ、そういう人ばかり。町外の担い手がいないと成り立たない」、という C 氏や D 氏の発言にある通り、よそ者・関係人口を積極的に受け入れ、社会的ネットワークを構築する姿勢がみえる。むしろ、祭りを維持するために、そのような対応を迫られている、ともいえる。インタビュー結果にあるように、長期にわたって継続的に商工会あんどん連に関わるよそ者・関係人口がいる。

これらを踏まえ、担い手に関するよそ者・関係人口の受け入れを軸に整理し、役場あんどん連、JA 北いぶきあんどん連、自衛隊あんどん連は「閉鎖的集団」、商工会あんどん連は「開放的集団」と概念規定する。開放的集団は、商工会あんどん連のような開放性、つまり、よそ者・関係人口を積極的に受け入れる集団、と定義づける。したがって、JA 北いぶきあんどん連や役場、自衛隊などの組織では、沼田町に居住していない者が存在するが、こうした存在は、居住こそしていないが、労働の場として沼田町に関与しており、特段、夜高あんどん祭りの維持のために関わっているのではない。したがって、よそ者・関係人口ではない。

縮小化する地域社会で、祭りを維持させていくためには、閉鎖的集団が開放的集団に変容することが求められる。その際、よそ者・関係人口は、開放的集団（あるいは地域社会）にどのように歓待されるのか、といった課題が浮上する。

5．結論

地域文化の維持が地域社会の持続可能性につながる。本稿は、その要件として以下の 2 点を結論づける。

①祭りは、社会的行為が価値合理的行為・伝統的行為に変容したことで、持続可能となっている。
②縮小社会化する地域社会における地域文化は、よそ者・関係人口によって維持可能となる。

①について、祭りを移植した当初の行為類型は、まちおこしのための目的合理的行為だった。しかし、時を経るにしたがって、担い手たちの社会意識が変容し、それに伴い行為類型も変容した。つまり、祭りを維持させていく様々な理由を背景に、行為類型は目的合理的行為から価値合理的行為・伝統的行為に変容した。祭りとは、目的合理的行為だけでは、継続することが困難である。なぜなら、目的合理的行為は、経済合理性と重なることがあるため、費用対効果を考慮し、祭りを実行することが負の経済的効果を生み出すのならば、廃止してしまう可能性があるからである。これに対し、価値合理的行為・伝統的行為は、経済合理性に重きを置くことがなく、祭りを継続させることに大きな意味を見出す。もちろん、祭りの継続には、多大な資金が必要であり、経済合理性を考慮しないわけにはいかない。しかし、経済的に窮地に陥ったとしても、簡単に祭りをやめることがない、その動機は、価値合理的行為・伝統的行為があってこそといえる。したがって、これらの行為類型に移行したということが、祭りの維持にとって重要な要件である。

次に、②について、人口の再生産が厳しく、縮小社会化する地域社会において、地域文化を維持するためには、

[13] U ターン者は、他地域で生活し、あらゆる経験を積んでいるという点で「地域内よそ者」と定義され、よそ者と類似の効果を地域社会にもたらす、といわれている（敷田 2009）。本稿では、U ターン者を調査対象としていないため、「地域内よそ者」がもたらした祭りへの効果については、今後の研究課題としたい。

よそ者・関係人口といった地域外住民の存在が要件となることが明らかとなった。本稿の事例でいえば、開放的集団が、その役割と機能を担っている。したがって、今後、祭りを維持するためには、閉鎖的集団が開放的集団に変容し、よそ者・関係人口と社会的ネットワークを構築していく必要がある。ただし、よそ者・関係人口のもつ効果が、地域文化の在り方を変容する可能性もある。変容することで、地域文化は何かを失う（例えば興趣、威信、伝統性など）、と危惧される側面もある。しかし、こうしたケースにおける地域文化の変容は、地域社会の持続可能性に関わる再帰性[14]として、肯定的に捉えることが望まれる。

おわりに―今後の研究課題

(1) フォーマル教育による地域文化の継承

各あんどん連は集団内において、あんどんの製作技術、祭りでの所作・振る舞い、踊りなどを、先輩から後輩（次世代）へと「見せて学ばせる」「やらせて学ばせる」というインフォーマル教育でおこなっている。

縮小化する地域社会において、祭りを継承するには、子どもの時期から、祭りに関する教育をフォーマル教育としておこなうことが望ましい。例えば、先行研究では、小学校における「総合的な学習の時間」のなかで地域文化を継承する取り組みなどが挙げられている（夏秋2021）。子どもは、学校教育における社会化の過程で、地域文化を内面化し、祭りに参加することが自明となり、ひいては、進学等の事由で、一度は故郷を離れても、いずれUターンしてくることに期待できる。沼田町でも小中学校における総合的な学習の時間のなかで、祭りの準備や練習をおこなっている。

さらに沼田中学校では、生徒の卒業時に祭りで羽織る半纏を贈呈している。こうした働きかけは、卒業生が次の担い手になる可能性を拓くだろう。これは、人口の社会減を抑制する効果に関わる。

(2) ノンフォーマル教育への展望

さらに、祭りの担い手が減少していくことを前提とすれば、年齢や出自を問わず、誰でも祭りの担い手になる機会が必要である。その処方箋として、ノンフォーマル教育に着目したい[15]。

北海道における地域創造教育実践の自己教育として、「地域文化の継承あるいは歴史教育」に触れ、地域文化の継承と創造にかかわっては、祭りの創造、地域の歴史に根ざしたイベントづくりに注目することが重要である、と指摘する先行研究もある（鈴木2000：68-69）。例えば、公民館を場として、地域住民と地域外住民が主体的に、あんどん祭りに関わる共有知（渡邊2013）を自己教育・相互教育し、よそ者・関係人口が祭りの担い手として育まれていく。こうした地域社会教育をおこなうことは、沼田町夜高あんどん祭りの継続性の指針となるだろう。

今後の課題としては、よそ者・関係人口がノンフォーマル教育のなかで、自己教育・相互教育を通し、どのように変容し、地域社会や地域文化の担い手として自己変容していくか。これを社会調査に基づいて明らかにすることである。そうした取り組みをおこなっている事例を検討し、アクションリサーチ・質的調査などの方法で、研究を深めていく必要がある。

[14] 再帰性とは、「社会活動全般が、それに関して新たに得られた情報や知識によって絶えず検討・改善され、その結果として当の営みがそれ自体、大きな変貌を遂げることになる」（山田2017：258）という概念である。

[15] ノンフォーマル教育の可能性については、筆者が地域社会学会2025年度第50回大会で報告している。

引用文献・資料・URL

卯田卓矢・阿部依子，2015「過疎地域における祭礼の存続形態―佐久市望月地域の榊祭りを事例として―」地域研究年報37号

井上果子，2019「山間地における地域住民による伝統文化持続の条件　高千穂郷椎葉山地域における神楽祭りの運営実態分析から」農村計画学会誌　Vol.38，No.3

川崎和也，2019「地方都市の祭りにおける祭縁としての社会関係―兵庫県篠山市・春日神社の秋祭りを事例として―」現代社会研究第5号

芳賀幹大・佐藤大輔・若松英・王嘉瑶・馬詩維・郭仕瑩・喜馬佳也乃・卯田卓矢・松井圭介．2020「地方都市における祭礼の維持形態に関する考察―鹿島神宮祭頭祭当番集落を事例に―」地域研究年報42号

松平誠，1990『都市祝祭の社会学』有斐閣

吉田竜司，2010「伝統的祭礼の維持問題―岸和田だんじり祭りにおける曳き手の周流と祭礼文化圏―」龍谷大学社会学部紀要第37号

竹元秀樹，2014『祭りと地方都市―都市コミュニティ論の再興』新曜社

武田俊輔，2019『コモンズとしての都市祭礼　長浜曳山祭の都市社会学』新曜社

敷田麻美，2005「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」『江渟の久爾』50号，江沼地方史研究会

敷田麻美，2009「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『国際広報メディア・観光ジャーナル』9巻，北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院

田中輝美，2021『関係人口の社会学　人口減少時代の地域再生』大阪大学出版会

小田切徳美，2014『農山村は消滅しない』岩波書店

Weber, Max, 1922. *Soziologische Grundbegriffe*. Tubingen: J. C. B. Mohr.（清水幾多郎訳，1972『社会学の根本概念』岩波書店）

鈴木文彦，2024「地方創生10年―人口減に歯止めをかける小規模自治体の所得向上戦略」大和総研

中川彩菜，2023「人口規模を安定的に維持してきた日本の小規模自治体に関する実証研究―日本における地方自治体の持続的発

展の在り方に関する考察—」RESEARCH BUREAU 論究（第 20 号）
沼田町，1995『沼田町百年史』沼田町役場
総務省統計局，2022「令和 2 年国勢調査　小地域集計　第 11 表　男女，産業（大分類）別就業者数（15 歳以上）—町丁・字等」総務省統計局
国立社会保障・人口問題研究所，2024「将来の地域別男女 5 歳階級別人口」国立社会保障・人口問題研究所
夜高あんどん祭り公式サイト　https://numata-youtaka.com/（2025 年 2 月 22 日閲覧）
鈴木健太，2024「地域文化の理論的枠組みに関する一考察　—持続可能な地域社会との関連で—」北海学園大学経済論集第 72 巻第 1 号
役場あんどん連，2024「令和 6 年度　役場あんどん連役員・実行委員名簿」沼田町夜高あんどん祭り・役場あんどん連
山田真茂留，2017「再帰的近代化」友枝敏雄ほか編『社会学の力　最重要概念・命題集』有斐閣
渡邊洋子，2013「グローバル・ローカルな学びとしての伝承・伝統文化—日本の『祭り』を手がかりに」相庭和彦，渡邊洋子編『日中韓の生涯学習　伝統文化の効用と歴史認識の共有』明石書店
太田美幸・丸山英樹編，2025『増補改訂版　ノンフォーマル教育の可能性　リアルな生活に根ざす教育へ』新評論
夏秋英房，2024「川崎市宮前区」牧野修也編，『変貌する祭礼と担いのしくみ〔第二版〕』学文社
鈴木敏正，2000『「地域をつくる学び」への道　転換期に聴くポリフォニー』北樹出版

参考文献

人口戦略会議編，2024『地方消滅 2　加速する少子化と新たな人口ビジョン』中央公論新社
藤山浩，2020『日本はどこで間違えたのか　コロナ禍で噴出した「一極集中」の積弊』河出書房新社
松下圭一・森啓編，1981『文化行政　行政の自己革新』学陽書房
森啓編，1988『市民文化と文化行政』学陽書房
牧野修也編，2024『変貌する祭礼と担いのしくみ〔第二版〕』学文社
祐成保志，武田俊輔編，2023『コミュニティの社会学』有斐閣
敷田麻美ほか編，2023『移動縁が変える地域社会　関係人口を超えて』水曜社
田光子，谷川幸雄，2006「学校・地域連携研究—沼田町「夜高あんどん祭り」の取り組み—」浅井学園大学短期大学部研究紀要第 44 号
渡邊洋子，2013「「祭り」という文化伝承・継承空間」京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター
内田和浩，2011『「自治体社会教育」の創造［増補改訂版］』北樹出版
内田和浩，2021『自治と教育の地域づくり　新・地域社会論Ⅱ』日本経済評論社
岡本薫，2004『行政関係者のための　新訂　入門・生涯学習政策』一般社団法人日本青年館
大澤真幸，2008『不可能性の時代』岩波書店
Luhmann, Niklas, 2002. *Einführung in die Systemtheorie*（Dirk Baecker 編，土方透監訳，2007『システム理論入門　ニクラス・ルーマン講義録【1】』新泉社）

謝辞

本稿の完成にあたり、役場あんどん連、JA 北いぶきあんどん連、商工会あんどん連、夜高あんどん実行委員会のご担当者に調査協力を賜りました。ご多忙のところ、長時間にわたる聞き取り調査にご協力くださいました。ここに、心より深謝いたします。